

小学1年生1学期の発達・適応を促進する幼児教育 —上越教育大学附属幼稚園出身児童の特性に基づいて—¹⁾

角 谷 詩 織²⁾*・泉 真 理**

(平成24年9月20日受付；平成24年10月19日受理)

要 旨

本研究では、遊びを通して学ぶことを大切にしている上越教育大学附属幼稚園の教育を受けた子どもが、小学1年生において、どのような力を発揮しているのかを明らかにすることで、質の高い幼児教育について考察することを試みた。2012年7月、附属幼稚園出身児童19名を含む小学1年生69名について、担任教師2名による評価を行った。評価の観点には、好奇心・探究心、主体性、自立、自律、伝え合う力、社会性、協同性、見通しを持つ力、集中性、学業面・適応面での心配の程度であった。分析の結果、附属幼稚園出身児童において、主体性、伝え合う力、社会性、協同性、集中性の得点が高かった。質の高い保育として、適切な環境の下での遊びを通じた保育の意義が見出された。

KEY WORDS

幼児教育、質の高い保育、遊びを通じた学び、教師評価、幼小接続

1 問題・目的

本研究では、遊びに十分浸ることを通して学ぶということを大切にしている上越教育大学附属幼稚園の教育を受けた子どもが、小学校において、どのような力を発揮しているのかを明らかにすることで、質の高い幼児教育について考察したい。

世界各国で、質の高い幼児教育の必要性が認識されて久しい(秋田・箕輪・高櫻, 2008; Rimm-Kaufman & Wanless, 2012; 高濱, 2006)。その背景には、PISAショックなど国の学力低下問題や、経済発展の問題が存在する(池本, 2011; 大野・七木田, 2011; 豊田, 2011)。OECD(2006)が強調するように、幼児教育の充実こそが、人間の生涯にわたる学習と発達、さらには国の経済復興を直接左右するものであり、すべての幼児に質の高い教育を施すことが求められている。イギリスでは、子ども中心、遊び重視の幼児教育が広く行われている(山本, 2010)が、その効果として、質の高い幼児教育を受けたかどうか、質の高い小学校教育を受けたかどうかと同等に、小学5年生の学力の高さに影響を与えること、これは、家庭要因の影響を統制した上でも成り立つことが示された(Sammons, 2010)。また、アメリカの経済学者は、国力回復のためには、幼児教育の質的向上に投資すべきであると論じている(Heckman, 2006)。さらに、脳科学の領域では、幼児期に前頭前野領域が急速に発達すること、前頭前野領域は、自己調整する力に深くかかわる領域であることを明らかにし、幼児期に、自己調整する力を育む教育が必要不可欠であるという見解を出している(Posner and Rothbart, 2006 無藤監修, 2012)。幼児期に質の高い教育を受けるかどうか、その後の人間の発達に大きな影響を及ぼす。

一方、日本の幼児教育は、世界各国の幼児教育と比較すると、遅れをとっている。国家が幼児教育に投資する予算の割合を国際比較した結果からも、日本の幼児教育の質的向上が課題であることを物語っている。国策レベルでは、認定こども園の拡充という緩やかな方向でしか進展していない。

質の高い幼児教育とは何か。幼児教育に求められていることは、幼児期の発達にふさわしい教育の中で、小学校以上の義務教育、さらにはその後の教育の基礎を培うことである。義務教育以降の教育の基礎を視野に入れた際、質の高い幼児教育として、小学校以降の学習内容を小学校以降の学習方法で、前倒し形式で教えたり学んだりする小学校化が生じる(七木田, 2005; 大野・七木田, 2011)。しかし、幼児期における学びは、感覚的・身体的であるという点で、自覚的・言語的学びが中心となる小学校以降の学びと大きく異なる(無藤, 2009)。幼児教育の質について議論する際には、幼児期の発達にふさわしい教育の中で、義務教育およびその後の教育の基礎を培うという3重性の中での質を問うことが重要である(無藤, 2009)。

この3重性の中での幼児教育の質を考える際に、その内容面と方法面にわけることが可能であろう。内容、方法の

両側面において質の高い幼児教育が望まれると同時に、それは幼児期にふさわしいものでなければならない。まず、教育内容に関わる側面において、幼児期にどのような力を育むことが求められていると考えられるだろうか。無藤(2011)は、幼小の接続を念頭に置いた上で、幼児期に「学びの芽生え」を育み、その芽生えを伸ばす形で小学校以降の教育が施されるべきであると論じている。この「学びの芽生え」に関わる力として、本研究では、自己調整する力と社会性を取り上げる。幼児期は、脳の前頭前野領域が急速に発達する時期であり、そこがつかさどる自己調整する力の発達に決定的な時期である(無藤, 2009)。自己調整する力とは、自分の内側から生じる多様な欲求や要求、外界から提供される多様な情報をコントロールし、その場その場において適切な対象に自分の興味・関心に向け、適切な行動をとることと捉えることができる。自己調整する力を幼児期に十分獲得できているかどうかは、その後の学業的・社会的発達に影響を与える(Bodrova & Leong, 2012; Rimm-Kaufman & Wanless, 2012)。保育の場でみられる自己調整する力としては、例えば、遊び終わったら、すぐにお弁当を食べたいけれど、後片付けをし、列に並んで手を洗う順番を待ち、タオルで手を拭き、所定の場所にきちんと座って、みんなで「いただきます」をするなどの日常生活習慣のレベルから、友だちと一緒にお化け屋敷を作りながら、意見の食い違いに何とか折り合いをつけて完成させていくという、高度な発展的遊びのレベルまでさまざまであるが、いずれも、社会的・情緒的な力だけでなく、認知的な力も含めた自己調整する力(Bodrova & Leong, 2012; Rimm-Kaufman & Wanless, 2012)が強く求められる。そして、自己調整する力の要素として、好奇心・探究心、主体性、生活習慣の自立、自律的行動、見通しを持つ力、社会性、協同性、集中性などが含まれる。

さらに、社会性もまた、小学校以降の学業・心理的適応に必要な不可欠な力である(Domitrovich, Moore, Thompson, and the CASEL Preschool to Elementary School Social and Emotional Learning Assessment Workgroup, 2012; Hemmeter & Conroy, 2012)。小学校入学後の学習面や心理面での適応のために必要な力として、聴く力、指示に従う力、協力する力・協同性、自立して行動する力、計画性(見通しを持つ力)、課題に最後まで取り組む力(集中性)があげられ、これらの力の基礎として、幼児期において社会性を育むことが重要である(Domitrovich et. al., 2012)。

一方、教育方法に関わる側面において、幼児教育においては遊びが決定的に重要なものとなる。感覚的・身体的学びは、遊びを通してなされる。遊びにどっぷりと浸りながら、幼児期に必要な自己調整する力を育てることが、幼児期における教育のもっとも大きなねらいである。遊びを通じた保育の重要性は、多くの研究において実証されており(eg., Trawick-Smith, 2012)、幼稚園教育指導要領や保育所保育指針にも記されている。

遊びが重要であるということは、幼児を放任したり、安全面だけに配慮して遊ばせておけばよいということではない。幼児期に必要な力を伸ばすためには、遊びの中で、子どもが、自分で発見し、自分で発展させていると感ずることができるような環境をよく考えて整えることが重要である(無藤, 2009)。特に、教師の意図を反映させる形で注意深く環境を整えた上での「フィールドベースのプロジェクト活動」を通して、子どもは、身体的・感覚的学びを豊かに体験し、小学校以降の学びの芽生えが育まれる(無藤, 2009; 2011)。

本研究において取り上げる上越教育大学附属幼稚園は、遊びを大切にした保育を通して、子どもの社会性や自己調整する力として、好奇心・探究心、主体性、自立、自律、伝え合う力、社会性、協同性、見通しを持つ力、集中性を育むことを目指している。そして、これらが、小学校以降の学業的・心理的適応にポジティブな影響を与えるであろうと考えている。本研究では、上越教育大学附属幼稚園の教育を受けた小学1年生が、どのような力を発揮しているのかをとらえることを通して、質の高い幼児教育について考察する。

2 方法

2.1 調査対象

上越教育大学附属小学校1年1組、2組の担任教師に、児童の様子についての質問紙調査を実施した。対象児童は、1組35名、2組34名、計69名であった。上越教育大学附属幼稚園出身児童は19名、その他の幼稚園・保育所出身児童は50名である。担任教師には、「1学期後半の児童の様子を思い浮かべ、感じたままに回答してください。」と指示をした。なお、調査は、児童の出身幼稚園・保育所の情報は記載せず、児童の出席番号順に回答を求めた。

2.2 調査時期

調査時期は、2012年7月25日～31日であった。

2.3 調査内容

担任をするクラス児童の1学期後半の様子を思い浮かべ、好奇心・探究心、主体性、自立、自律、伝え合う力、社会性、協同性、見通しを持つ力、集中性、学業面・適応面での心配の程度を尋ねた(付表1)。集中性を除く8つの観点は、上越教育大学附属幼稚園で重視している8つの観点であり、各項目は、附属小学校1年生の観察評価のために附属幼稚園教師が作成した評価項目を修正・加筆したものである。これら8つの観点と、学業面、適応面での心配の程度は、2011年度の附属小学校1年生担任への質問紙調査においても尋ねた項目(上越教育大学附属幼稚園, 2012a)であり、それぞれ3項目から構成される。このうち、「みんなと協力して何かしなくてはならないときでも、自分のやりたいことを優先してしまう。」の1項目は、因子分析の結果、協同性に含まれなかったため、「みんなと協力して何かしようとするとき、全体で何が必要かを考えて自分の行動を決めることができる。」に変更した上で項目を作成した。集中性は、2012年度4月～5月に実施した附属小学校1年生の観察において、観察者が附属幼稚園出身児童の特性として見出した観点で、新たに4項目追加した。回答方法として、「1. あてはまらない」～「4. あてはまる」の4件法での回答を求めた。分析に先立ち、反転項目はすべて反転させ、得点が高いほどポジティブな結果を示すようにした。

結果の分析には、SPSS ver.20を使用した。

2.4 上越教育大学附属幼稚園の保育特性

当園は、従来より、「遊び」を通して、幼児は身近な人や自然に対する気付きを生むこと、主体的な遊びの場面に応じて個別の対応をすること、幼児の興味・関心をもとに、直接体験できる環境を十分保障することを重んじた実践を行ってきた。特に、2010年度より、文部科学省研究開発学校指定を受け、「幼少の円滑な接続を促す幼児教育の推進」に取り組んでいる。この研究を通して、「遊び」の中で小学校からの学びの基盤となる力がどのように培われているのか、また、どのような指導や環境構成をすることが幼児の学びを充実させ、基盤となる力を確かなものにしていくのかを明らかにすることを目指している。小学校からの学びの基盤となる力として、好奇心・探究心、主体性、自立、自律、伝え合う力、社会性、協同性、見通しを持つ力の8つの観点を設け(付表2)、その育成に力を入れている。2011年度と2012年度は、当園出身の小学1年生が、これら8つの力を小学校でどのように発揮しているのか、小学1年生の4月～5月に児童の観察評価を試みている。

日々の保育の中でも、教師が遊びを通して子どもが学ぶということを大切にしている。9時頃からは、長いときには11時半頃まで、子どもは自由遊びに没頭する。3歳児は、園庭でとれた木の実や草花を使ったおまごごとや色水づくりをしたり、虫を捕まえたり、園で飼育しているウサギと遊んだり園庭の池に入ったりと、自然を堪能する。4歳児は、園庭の土山で、水とスコップを用いたダイナミックな土遊びが盛んに行われる。また、お店屋さんごっこや、ヒーロー、ダンサーなどになりきって、友だちと一緒に遊んで見立て遊びに没頭する姿が多くみられる。5歳児は、園庭でのサッカーなど、ルールのある遊びがなされる。お遊戯室では、年長児が中心となり、お化け屋敷など何日もかけて大がかりなプロジェクトベース活動がなされることもある。いずれのクラスも、教師が直接関わっている遊びはダイナミックに長時間持続する傾向があるが、その中で、教師は、遊びを指定したり、子どもに指示するのではなく、子どもと同じ方向を向いて保育をしている。「どうしたらいいかなあ。」「**ちゃん、何かいい考えありそうだね。」など、子どもが主体的に遊びを発展させるような言葉かけが多くなされる。また、「見て見て、**くんの色水、こんなふうになったよ。何を入れたらこうなるのかな?」など、子どもの工夫や気づきを他の子どもに知らせる言葉かけも多くみられる。

保育後は、その日の保育を振り返り、その日の遊びの発展に必要な環境は何かを考え、翌日のために整える。さらに、保育エピソードを蓄え、子どもが遊びの中で何を学び獲得したかを考えている。

3 結果

3.1 合成変数の作成

9つの観点について、それぞれ1因子性の確認を行った。「見通しを持つ力」の1項目「教室の時計や校時表を見ながら、自分で次の活動の準備をする。」の共通性が.08と低かったため、除外した。信頼性係数 α の値は、それぞ

れ、好奇心・探究心は.87, 主体性は.72, 自立は.75, 自律は.71, 伝え合う力は.75, 社会性は.76, 協同性は.76, 見通しを持つ力は.70, 集中性は.84であった。それぞれの因子構成項目の得点を単純加算平均したものを、合成変数得点とした。

3.2 出身園による9つの観点の得点の差

9つの観点の得点について、出身園による差がみられるのか検討した。児童の評価の厳しさは、担任により差が見られることが予測されるため、出身園×組の二元分散分析を行った。出身園×組別のMとSD、および、分散分析結果を表1に、出身園×組別の平均値を図1～9に記す。

分析の結果、主体性 ($F(1,65)=4.15, p<.05$), 伝え合う力 ($F(1,65)=3.54, p<.1$), 社会性 ($F(1,65)=3.71, p<.1$), 協同性 ($F(1,65)=5.27, p<.05$), 集中性 ($F(1,65)=2.93, p<.1$) において、附属幼稚園出身児童の方が、他園出身児童よりも得点が高かった。自立は、出身園×組の交互作用が有意であった ($F(1,65)=4.12, p<.05$)。下位検定の結果、他園出身児童において、1組の方が2組よりも得点が高かった ($F(1,48)=37.35, p<.001$)。出身園による自立得点の差は見られなかった。

表1 出身園×組別の観点ごとのM,SDおよび分散分析結果

		附属 (n=19)		その他 (n=50)		主効果		交互作用
		M	SD	M	SD	出身園	組	
好奇心・探究心	1組	3.78	.17	3.49	.10	1.95n.s.	37.27***	.48n.s.
	2組	2.83	.16	2.74	.11			
主体性	1組	3.67	.16	3.36	.09	4.14*	.01n.s.	.12n.s.
	2組	3.63	.15	3.42	.10			
自立	1組	3.04	.15	3.36	.09	.34n.s.	20.24***	4.12*
	2組	2.73	.14	2.56	.09			
自律	1組	3.22	.15	3.26	.09	.23n.s.	6.43*	.56n.s.
	2組	3.00	.15	2.85	.09			
伝え合う力	1組	3.48	.21	3.09	.12	3.54†	.41n.s.	.19n.s.
	2組	3.30	.20	3.06	.13			
社会性	1組	3.30	.15	3.09	.09	3.71†	7.07**	.06n.s.
	2組	3.00	.14	2.74	.09			
協同性	1組	3.70	.13	3.41	.08	5.27*	29.77***	.16n.s.
	2組	3.07	.13	2.86	.08			
見通しを持つ力	1組	3.00	.18	2.77	.10	1.99n.s.	16.15***	.04n.s.
	2組	3.55	.17	3.38	.11			
集中性	1組	3.17	.10	3.04	.06	2.93†	9.52**	.02n.s.
	2組	2.93	.10	2.77	.06			

Note : † $p<.1$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

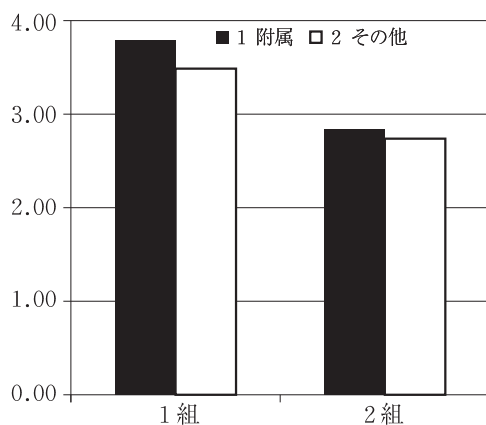


図1. 出身園・クラス別の好奇心・探究心得点

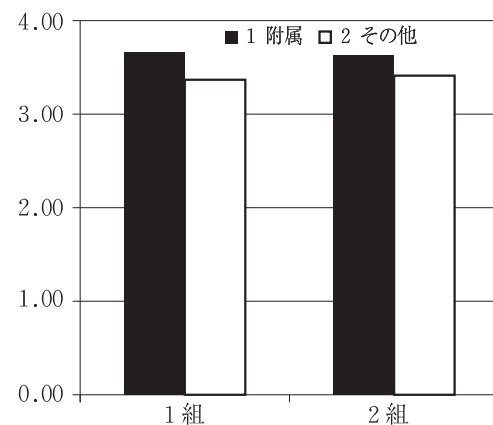


図2. 出身園・クラス別の主体性得点

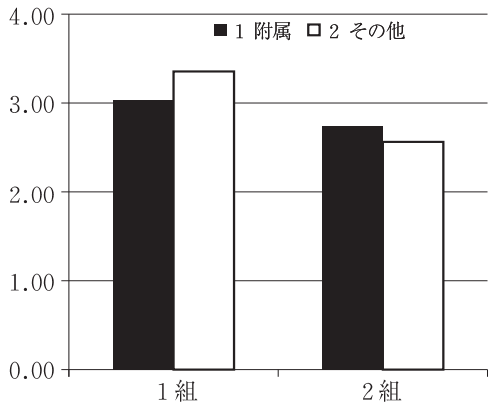


図3. 出身園・クラス別の自立得点

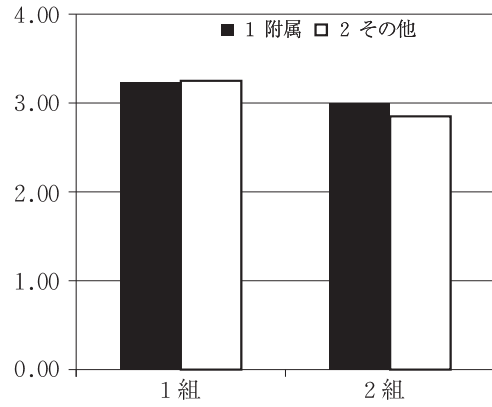


図4. 出身園・クラス別の自律得点

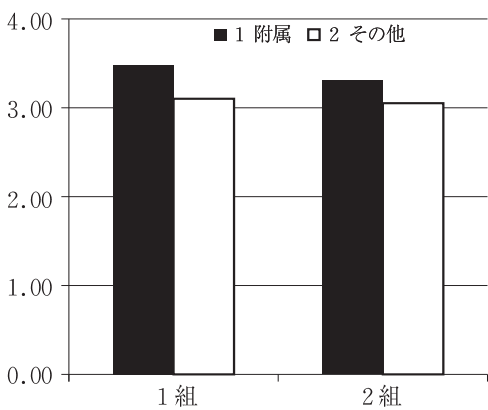


図5. 出身園・クラス別の伝え合う力得点

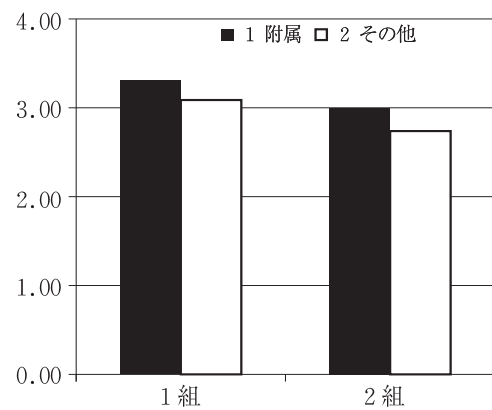


図6. 出身園・クラス別の社会性得点

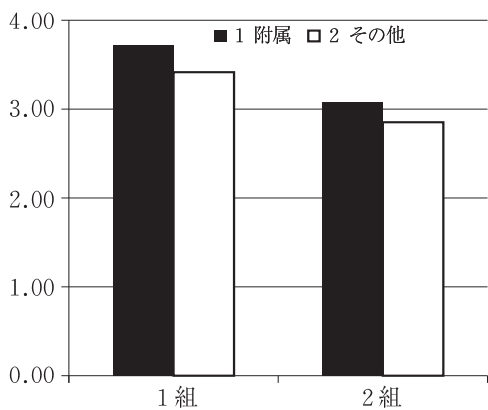


図7. 出身園・クラス別の協同性得点

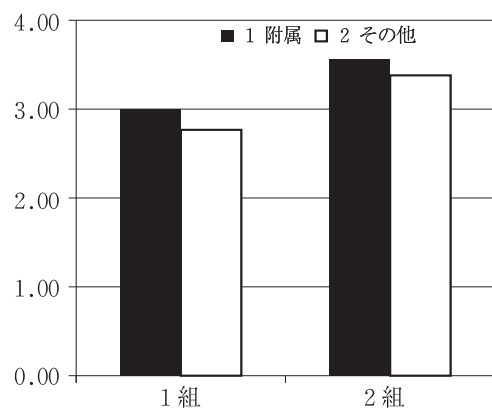


図8. 出身園・クラス別の見通しを持つ力得点

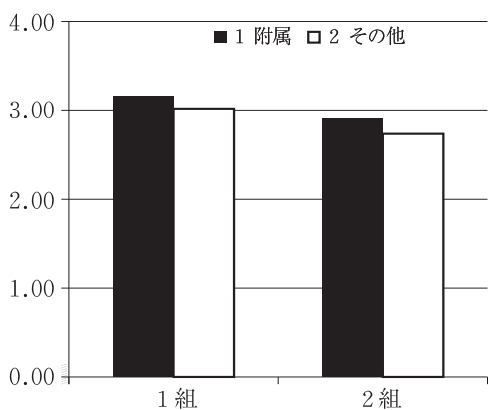


図9. 出身園・クラス別の集中性得点

3.3 出身園による学業・適応面への心配の差

学業面、適応面への心配の程度について、出身園による度数の違いを検討するために、各項目の度数について χ^2 乗検定を行った。各セルに含まれる度数が極端に少なくなる状態を回避するために、回答の「心配」と「どちらかという心配」を「1」に、「どちらかという心配はない」と「心配はない」を「2」にまとめ、組もまとめて分析を行った。分析の結果、出身園による度数の差は見られなかった。表2に、学業面・適応面への心配の程度別度数を記す。

表2 学業面・適応面での心配の程度別度数（人）

		1（どちらかという心配）	2（どちらかという心配はない）
学業面	附属	1	18
	その他	4	46
適応面	附属	0	19
	その他	3	47

4 考察

附属幼稚園出身児童の特性として、主体性、伝え合う力、社会性、協同性、集中性の力が発揮されているということが考えられる。つまり、学校での様々な場面・課題において、友だちと協力し、コミュニケーションをとりながら主体的に考え、また、課題に集中して取り組んでいる様子が見られる。これは、社会性や自己調整する力が、遊びにどっぷりと浸る中で、友だちと協力したり、コミュニケーションをとる経験を日々重ねる中で培われるものであることを裏付けた結果であると考えられる。教師のねらいや願い、意図を反映させながら整えられた環境の中で、子どもが主体的に遊ぶ中で、「学びの芽生え」が生じており（無藤, 2011）、小学1年生の段階でそれが発揮されていることが推測される。

一方、好奇心・探究心、自立、自律、見通しを持つ力については、出身園による差は見られなかった。学業面や適応面での心配についても、出身園による度数の差は見られなかった。多くの幼稚園や保育所では、午前中十分に遊ぶ時間を設けるなど、多くの場合共通している保育の要素もみられる（無藤, 2009）。「学びの芽生え」の中でも、今日の日本の多くの幼稚園や保育所のあり方で育むことのできる芽生えもあることが推測される。今後は、附属幼稚園以外の幼稚園や保育所の保育の在り方等の特性も詳細に把握することで、出身園による差が見られた力を中心に考察を深めることが必要であろう。また、本研究では、家庭要因、個人特性の影響を統制した上での結果ではない。これらの要因も、子どもの発達には大きな影響を与えているため、今後、これらの影響を考慮した研究を進めることが求められる。

注)

- 1) 本研究は文部科学省科学研究費若手研究(B)（課題番号22730507、研究代表者 角谷詩織）の助成を受けた。
- 2) 研究の実施に当たり、白梅学園大学 無藤 隆教授にご指導いただきました。記して感謝致します。

引用文献

- 秋田喜代美・箕輪潤子・高櫻綾子（2008）. 保育の質研究の展望と課題. *東京大学大学院教育学研究科紀要*, 47, 289-305.
- Bodrova, E., & Leong, D. L. (2012). Scaffolding self-regulated learning in young children : Lessons from tools of the mind. In R. C. Pianta (Ed.), *Handbook of early childhood education* NY : Guilford. pp.352-369.
- Domitrovich, C. E., Moore, J. E., Thompson, R. A., & the CASEL Preschool to Elementary School Social and Emotional Learning Assessment Workgroup. (2012). Interventions that promote social-emotional learning in young children. In R. C. Pianta (Ed.), *Handbook of early childhood education* NY : Guilford. pp. 393-415.
- Heckman, J. J. (2006). Skill formation and the economics of investing in disadvantage children. *Science*, 312, 1900-1901.
- Hemmer, M. L., & Conroy, M. A. Supporting the social competence of young children with challenging behavior in the context of the teaching pyramid model : Research-based practices and implementation in early childhood settings. In R. C. Pianta (Ed.),

- Handbook of early childhood education* NY: Guilford. pp. 416-434.
- 池本美香 (2011). 経済成長戦略として注目される幼児教育・保育政策—諸外国の動向を中心に—. *教育社会学研究*, 88, 27-45.
- 上越教育大学附属幼稚園 (2012a). 幼稚園教育と小学校教育の接続期におけるリテラシーの基盤形成に向けた学習者の学び合い, 支えあう協同体の育成を目指すカリキュラムと指導方法等の研究開発: 平成23年度研究開発実施報告書 (第2年次研究)
- 上越教育大学附属幼稚園 (2012b). リテラシーの基盤形成と接続プログラム: 幼小接続を考える vol.2. 平成23年度研究紀要
- 無藤 隆 (2009). 幼児教育の原則—保育内容を徹底的に考える— ミネルヴァ書房.
- 無藤 隆 (2011). 保育の学校1—保育の基本と学び 編— フレーベル館.
- 無藤 隆 (2011). 保育の学校3—5つの今日的課題 編— フレーベル館.
- 七木田敦 (2005). ニュージーランドにおける就学前教育改革について—幼保の一元化からカリキュラム策定まで—. *保育学研究*, 43, 100-108.
- OECD. (2006). *Starting Strong II: Early Childhood Education and Care*.
(OECD (編著) 星三和子・首藤美香子・大和洋子・一見真理子 (訳) (2011). OECD保育白書—人生の始まりこそ力強く: 乳幼児期の教育とケア (ECEC) の国際比較 明石書店)
- 大野 歩・七木田敦 (2011). スウェーデンの就学前クラスに関する研究—「学校化」問題と生涯学習アプローチの観点から—. *保育学研究*, 49, 19-29.
- Posner, M. I., & Rothbart, M. K. (2006). *Educating the human brain*. American Psychological Association.
(ポズナー, M. I.・ロスバート, M. K. (著) 無藤 隆 (監修) (2012). 脳を教育する 青灯社)
- Rimm-Kaufman, S. E. R., & Wanless, S. B. (2012). An ecological perspective for understanding the early development of self-regulatory skills, social skills, and achievement. In R. C. Pianta (Ed.), *Handbook of early childhood education* NY: Guilford. pp.299-323.
- Sammons, P. (2010). Do the benefits of pre-school last? Investigating pupil outcomes to the end of Key Stage 2 (aged 11). In K. Sylva, E. Melhuish, P. Sammons, I. Siraj-Blatchford, & B. Taggart (Eds.), *Early childhood matters: Evidence from the effective pre-school and primary education project*. Oxon: Routledge. pp.114-148.
- 高濱正文 (2006). 保育の質的向上に関する研究 (I)—第三者評価に見られる現場サイドの質的向上の視点を手がかりとして—. *今治明德短期大学研究紀要*, 30, 43-54.
- 豊田和子 (2011). ドイツの幼稚園における「教育の質」をめぐる議論と成果—Tietzeら (ベルリン自由大学研究グループ) を中心に—. *保育学研究*, 49, 29-40.
- Trawick-Smith, J. (2012). Teacher-child play interactions to achieve learning outcomes: Risks and opportunities. In R. C. Pianta (Ed.), *Handbook of early childhood education* NY: Guilford. pp.259-277.
- 山本和美 (2010). 幼児教育の質的向上に関する研究 風間書房.

付表1 小学1年生担任への質問項目と観点

	質問項目	観点
1	いろいろなことに興味関心をもって物事に取り組む。	
2	なぜだろうかと思ったことや、調べ始めたことは、多少の困難があってもあきらめずに探求し続ける。	好奇心探究心
3	授業に意欲的に取り組む。	
4	自分のやりたいことを見つけて取り組む。	
5	物事が、より良く（より楽しく）なるように、自分から工夫する。	主体性
6	やりたいことが見つからず、教師の言葉かけや手助けを必要とする。	
7	机やロッカーなど身の回りのものが整理整頓されている。	
8	忘れ物が多い。(反転)	自立
9	置き忘れ、落し物が多い。(反転)	
10	学校やクラスの決まりごとを守って活動している。	
11	やりたくないことでも、やらなくてはいけないことは、先生に言われなくても自分から取り組む。	自律
12	自分がやりたいことがあっても、すべきことを優先して行動できる。	
13	話し合いの場面で、自分の考えを友だちに話したり、人前で発表できる。	
14	意見を求められても答えられない。(反転)	伝え合う力
15	豊かな語彙を用いて表現できる。	
16	友だちのことを考えて発言する。	
17	友だちがしてほしいことを察して行動する。	社会性
18	何かトラブルが起きた時、自分のことだけでなく、友だちのことも考えて解決しようと努力する。	
19	みんなで何かをやり遂げようとするとき、積極的に話し合いに参加する。	
20	役割を分担してみんなでやり遂げようとする。	協同性
21	みんなと協力して何かしようとするとき、全体で何が必要かを考えて自分の行動を決めることができる。	
22	教室の時計や校時表を見ながら、自分で次の活動の準備をする。	
23	次に何をしたらよいか分からずにボーっとしていることが多い。(反転)	見通しを持つ力
24	先の見通しをもって、今すべきことを考えて行動できる。	
25	自分で納得がいくかどうかを大切にして、学習活動を進めている。	
26	授業で出てきた課題に集中して持続的にとりくむ。	集中性
27	友だちが「できた！」などの声をあげても、それに振り回されずに自分の課題に取り組み続ける。	
28	集中力がある。	
29	学業面で心配な点がある。(反転)	
30	適応面で心配な点がある。(反転)	

Note: 「各児童の最近（1学期後半）の様子を思い浮かべ、直観的にご回答ください。」との指示のもと、担任するクラスの児童一人一人について回答を依頼した。

付表2 上越教育大学附属幼稚園のとらえる8つの「小学校からの学びの基盤となる力」

観点	定義
好奇心・探究心	自分のまわりの事物や事象に対する気付きや感性
主体性	様々なことを自分でやろうとする心情や意欲・自信
自立	生きるために必要な基本的な生活習慣等を身に付けること
自律	状況を判断し適切な行動をとれるようになること
伝え合う力	興味をもって活動する中で、気付いたことや自分の思いを人に伝えたり、相手の話を聞いたりすること
社会性	所属する社会（幼稚園）の文化や規範、あるいは習慣が分かり、それに順応して行動すること
協同性	互いに仲良くすることからさらに進んで、互いに配慮して分担しさらに活動の進展に伴いやりとりを重ねて共通の目的を達成していくこと
見通しを持つ力	先のことを考えて適切な行動をとること、相手の気持ちを察して適切な言葉かけや働きをすること

上越教育大学附属幼稚園 (2012b)

Early Childhood Education Fostering the Development and School Adjustment of First-Grade Students:

The Abilities of Students Graduated from the Kindergarten Attached to Joetsu University of Education

Shiori SUMIYA* • Mari IZUMI**

ABSTRACT

The purpose of this study is to examine the nine abilities and the characteristics of school adjustment of first graders who have graduated from the Joetsu University of Education Attached Kindergarten, which emphasizes children's autonomous play. In July, 2012, two homeroom teachers estimated their 69 students' curiosity, initiative, independence, autonomy, communication skills, sociality, cooperativeness, sense of perspective, and concentration skills, in addition to their academic and school adaptation. Students who had graduated from the above-mentioned kindergarten exhibited superiority in their initiative, communication skills, sociality, cooperativeness, and concentration skills. This paper discusses the high quality of early childhood education achievable through children's autonomous play.

* School Education ** Kindergarten Attached to Joetsu University of Education